子どもと(5)

八月・たより

清水　光子

保育者と一緒でなければ何もしない、遊ぼうとしないU君は、泣きもしないでT子と一しょに私の両側にくっつききりで一学期を過ごした。M君は砂場が好きで、一日中砂場に没頭しており、雨の日は廊下で外を見たり友だちの遊ぶのをみているが、殆ど話はしない。保育者のことばかけに、短く〝うん〟とか〝いいよ〟とかの答えは返ってくる。Y君は気がつくと指をしゃぶっている。ことばで訴えないで、まず泣いてくるCちゃん。〝このお手々いいお手々よ〟と○くんの手を賞めながら、たたかれたSちゃんを慰める苦しさ。など、などの夏休み前だった。

夏休みに入って一学期の反省やらお休み中のあれこれをし、或る解放感と自由感をもちながらあちこちの研究会や勉強会に参加もした。そして八月。聞き慣れた子ども達の歓声

（必ずしもそうばかりではないものの）から遠ざかった十数日、何か物足りなくて、研究会でのあのことを早く子ども達と一緒にしたい、あのうたを歌って踊りたい。あのお話を劇みたいにしたいなど、心に湧き起こる衝動のようなものを感じる保育者の八月。

下のお子さんが四月から入園した〇さん。午前中は誰もいない私だけの家、自由な時間！かといって決して子どもを案じないのではなく、かえって、今頃友だちに叩かれて泣いてるのではないか、間にあわなくておもらししているのではないかとか、限りない親の取り越し苦労をしていた日々。今は子ども達が我が目の届くところにいる夏休み、八月のお母さん。

保育者も親も休みらしい生活のリズムが出来てきた。人間って勝手なもの、変化を好むというか、同じ状態を続けることはきらいにできているらしい。それでこそ進歩があるのかも知れない。自らを新にする努力、と倉橋惣三先生が言われたのはこのようなこと、そこに楽しみを見出せることかも知れない。そこで保育者は、小さい恋人達にせっせとラヴレターをかく。旅先で買った絵葉書、野の花を押し花にした葉書、得意のイラストで自画像を描いたり、子どもと一緒に種まきをした朝顔の赤い花の写生をしたのだったり。「子どもの気持ちって、ごく深いものよ」と先輩の、文学者であり保育者であった先生の言葉を思い浮かべながら、老子の「上善は水の如し」子どもの気持ちはそうなのね、など独りうなずきながら。ひとりひとりに語りかけるように、目の前にまなざしをみつめているような思いでかく。けれど、ことばは簡単に〝お元気？私も元気で、泳いで黒くなりまし

た〃〃〇〇山へリュックを背負って登ったの、うぐいすが鳴いていました。もっと登って天(てっ)ぺんについたら海が見えたのよ！〃などと。

返事が来るのである。何と！仮名と覚しき字にはお母さんから解説がついている。〃象をのみ込んだウワバミの絵〃かしらとみえるのにも解説づきで。こうした解説づきをよこしてくださる親御さんの心がありがたく心に響く。胸を熱くして何度もよみ返す。お母さんや、まれにはお父さんの手蹟の添えがきにお子さんの近況が報じられて、うれしかったり安心したりする。〃〇子はもう園に早く行きたいと言います〃「これ、幼稚園に持っていくんだ」とあき箱で何だか作っています。〃などと書かれていると、〃私も早くあなたに逢いたいのよ〃と心に叫ぶ。恋人達に逢いたい熱い想いをこらえて、それぞれの声音、しぐさ、表情を目に浮かべて恋を楽しむのである。水遊びが好きで唇を紫色にして、いくら出ましょうと言ってもきこうとしないM君が、泳いでいるという海の絵を送って来た。お母さんの手蹟で、〃残り少ないお休みを一ぱい楽しみたい。〃とあったうれしさ。

子ども達は、大体水が好きのようである。海でも川でも池でも、小さな水溜まりでも。だからこそ危険を防ぐ必要がある。それは大人の役目である。生命は水辺から生まれたのである。自然に対して恐れて近づかないのではなく、近づいて知って畏れる。森でも山でも岩でも鳥でも獣(けもの)でも何でも、自然とのつきあい方はそのようなやり方もあるのではないかと思っている。

水について言うと、孔子さまが水を話に引いて弟子を指導されたとある。「水は必ず低

きに流れる。曲ったりくねったりしていても常に一定の道理に従っているのだ。その点『義』を備えているかのようだ。水は湧き出て尽きることがない。この点で『道』があるかのようだ。堤を切って放流させると、深い谷底にもとび込む。恐れないという点で『勇』があるかのようだ。どんな狭い処にも浸透する。この点は『洞察力』を持つに似ている。汚れたものを洗い落とす点は『感化』ということにそっくりだ。だから君子は川を眺めることを好むのだ。」と。（森本哲郎　「ことばへの旅」より）人間の本性の源に、水との関わりの深さを想うのである。

とまれ、八月の身辺の自然は確実に秋に向かって傾いている。七月のあのギラギラと照りつける太陽はどうしたのかと、訝りたくなる日射しを感じる日がある。日を瞑っているのに……耳をふさいでいるのに……云々の詩のように絶えず廻っている地球。木々はもう来年の新芽を用意しているし、野原にはひっそりとおみなえしや赤まんまが蕾をふくらまし、バッタやキリギリスの幼い子がかくれんぼをしている。

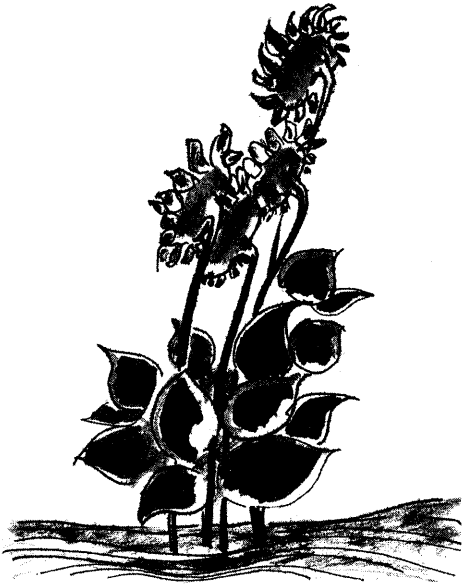
〃月後れのお盆に田舎に行って、T男は姉と燈ろう流しを見ました〃〃Uは私の故郷の夏祭りでおみこしをかつがせて貰い、あの泣き虫の得意気な顔をおみせしたいと思いました。〃〃夏の終わりの花火大会、ほんとうにきれいでした。一家で、一kmほど離れた、海へそそぐ川の橋から眺めましたが、言葉では表わせない美しさでした。〃斯うした便りが届く度に想うのは、子どもの心の中にこの夏が育んだものの大きさである。大人が幼い時の思い出を語るとき、きっと出るのは自然の姿である。子ども達はその時、実体験で得たも

のをしっかりと貯めこんでいる。山の大杉であったり、黒い影のような老松であったり、キラキラ輝いた水紋であったり、魚鱗であったり、又はお祭りの夜店の匂いだったり。

よられつる　野もせの草のかげろいて　涼く曇る夕立の空　　西行

はげしい雷雨、青い稲妻の不気味さ、雷鳴の恐ろしさ、オズの魔法使いの映画をみていてしがみついたA子は、虹が出たとき思わず声をあげた。オーバー・ザ・レインボウのメロディが心のどこかにひびき残っているかも？

夕日遠く　金にひかれば群童は　眼つむりて斜面をころがりにけり　　斎藤茂吉



夕日が赤く沈む時刻がずい分早くなった。夕日を浴びて草の斜面をころがるというぜいたくな経験を子ども達にぜひさせたいものと思う。

ことはむ　なれもや物を思ふらむ　諸共(もろもろ)になく夏のひぐらし　　建礼門院右京大夫

ひぐらしが啼きはじめると秋だという。Y君は兄さんと毎日蟬取りをしているとの便りだったが、今はどんな蟬がいるのかしら、君の家のそばに。〃Yちゃん、私の家の栗の木の根元に蟬のぬけ殻を見つけたのよ。幼稚園、もうじき始まりますね。持って行きます。〃と返事に書いた日、めっきり高くなった青空だった。

確実に子ども達は成長した姿を見せて呉れる。その期待に胸を弾ませる一方、空気の抜けたゴムまりのようであってはならないと我と我身心を反省をする八月、夏の終りである。

倉橋惣三先生の『幼稚園雑草』の中の「夏やすみ後」の中に書かれている雑草礼讃を改めて今感じ入っている。

（音羽幼稚園）